

# 乳児期における母子相互関係と 2～3才児の母子分離の関連

岡 宏 子（聖心女子大）

## 全体的目的

母子間の絆の早期確立の問題については、母胎内の刺激要因、胎児の能力、妊娠中の母子相互交渉、出産直後の関係の確立の問題、等々が、着々と明かにされ、それにつづく、乳児初期の母子相互の循環的関連のあり方についても、多くの研究がなされるようになった。その結果、母子相互の絆の成立と確立が、子の精神発達の必須条件であることも、強調されている。

しかし、このような関係が、いわば望ましい形で成立することは、子の其の後の発達、人間形成の何を、どこまで保障することになるのか、その関連のあり方の評価は、まだ十分に分析されていない。

このまだ明確にされていない、初期の母子関係とその後の関係との関連について、分析をすすめる第一歩を、初期の母子相互関係の型と、子の成長過程のある時期のそれとの関係の連続と変化を把握し、その関係のあり方を探る試みによって、進めてみることを、三年間を通しての全体的目的とする。

## 1年目の研究計画

まづ上記の目的を具体的な方法に結びつけるための試みとしての方法を探り、設定する。

対象は、乳児とその母親を一組とするが、その月令は適切なものがあるか、— 関係の把握にも、又児の精神発達のチェック可能性、それまでの母の態度がある程度、その発達に影響をもたらしていることの可能性を考えて、— の検討。その後の変化は、同一対象児では、三年目にまたねばならぬが、その折の母子関係と児の発達をとらえる適切な方法を確立しておく必要があるので、2～3才の幼児と母を一組にした別対象を設定し、その母子関係を把握し、後に乳児期のそれと関係させることが出来るかを検討する。

以上の分析のために用いる適切な面接、質問紙、

実験の方法のくみ合せを実際に検討する。

## 2年目の計画

一年目の結果をふまえて、若し不備があれば更に修正を加えた上で、対象児数を拡大し、50組（可能なら100組）のペアにその方法による面接、修正、そして一部には実験を行い関係をみる

## 3年目の計画

一年目に乳児期でとらえた対象組の2才時点における母子関係を、2年目に改良された方法で把握、分析を行い、乳児期と幼児初期の母子関係の関連をみる。初期の母子の関係は、この時点ではどう変化するのか、又児の精神発達への影響は？を検討し、全体的目的への一つの示唆を提供したいと計画している。

## 昭和58年度研究報告

本年の研究は計画書で述べた通り、母子関係成立とその後の変化の関係を分析するための方法設定の段階を果すことであった。

(1)対象組の児の年令設定、(2)乳児期母子関係の把握と母の態度が乳児の発達に如何なる作用をもつかをみるための、乳児及母への操作の設定、(3)乳児期の母子関係を、乳児期のそれからの変化として対比して把握し得る方法の設定、(4)上記の方法により、実際に面接、調査、実験を試みて、方法の妥当性を確定する。の4つの面から研究をすすめた。

## その結果

(1) 乳児は9ヶ月～13ヶ月の母子一組、幼児は、2～3才の母子組に決定。初期の母子の関係の一定の型が、ある程度、乳児の発達に作用を及し、その発達が明かに把握出来ることは、やはりこの時期をおいてない。又、2～3才の自我の芽ばえによる行動の変化は、母の態度にある種の変化を与えるので、初期の母子関係が、どんな変化となるかを把握しやすい。

(2) 乳児の精神発達を各領域別にもとらえ得る

発達診断をつくる。母の態度は、具体的な多種のかかわりと感情、自己の生活感情をも含めた、これも型としてとらえられる質問紙を何回かの試みを経て作製

(3) (2)と対応出来るように2～3才時点での児の発達と母の態度についての質問紙も同じく何回かの試行の上、一応作製。

(4) 乳児と母をついにした対象に、(2)の方法で、その関係をとらえ、更に、これも計画書にのべた

(B)の幼児(1年目では、乳児期の対象とはことなる児となることは止むを得ない)と母の対に対して、質問紙による調査施行。

まとめ 質問紙作製、方法の設定は一応終了し、この方法により乳児期及幼児期の時点における母子の関係の変化をみたが、はじめに考えていた程、これらの変化は大きくない。ただ、母の態度と子の発達との関係とは、両期にやや差異がみられた。